新しければ知らない町

第二十八弾　哲ちゃんの六角・思い出の街角編

去り行く町の面影がある。
新しく生まれる街もある。
けれど、思い出はけっして消え去りはしない。
それは胸の中に
いつまでも生きつづける。
僕たちは、
この町で生まれ、この町で育った。

昔はねえ、この辺りに小学校の正門があったんですよ。変わってしもたなあ……

同級生と、そのお母さんを前に談笑する哲ちゃん。このお茶屋さんは、ずっと昔のまま。

奥田　哲朗（52歳）

昭和十六年生まれ。うどん店・藤六の七代目主人であると同時に、有限会社藤六・代表取締役でもある。祇園三若御輿会の会長を勤める地域の顔役的存在。公私ともに、忙しい日々を送る。

昔の面影をとどめる自転車屋さん。子供の頃を思い出させてくれる、数少ない場所のひとつ。

最近改装した"藤六"の前で。木造だったお店も、今では瀟洒なビルの1階部分にしつらえてある。

はじめてチョコレートを食べた日のこと、憶えていますか？

いきなりこんな質問をされて、スラスラ答えられる人は、滅多にいないだろうなあ。

でも、哲ちゃんはその日のことを今も鮮やかに憶えている。

「あれは、いつのことやったかなあ。MP（進駐軍）がガムやチョコレートをよくバラ撒いとった。僕らそれを拾いにいったもんです。特にあの板チョコの味は忘れられへん。美味しかった。ほんとうに美味しかった。今でもその味を懐かしんで、チョコレート買ってみることあるんです。でも、あの味にめぐりあうことはないねえ」

哲ちゃんこと奥田哲朗氏は昭和十六年生まれの五十二歳。あの時、生まれてはじめて食べたハーシーズのチョコレートの味は、今でも忘れられない。この街・中京区東洞院六角で生まれ育った懐かしい想い出……

次々と建設される新しいビル。時折、ぽつりと顔をのぞかせるかつての町屋。それは、黙々と仕事をする老職人の背中にも似て、ひっそりと佇んでいる。アスファルトを覆く交錯するビルの影。いつしか、町は街へと変貌を遂げた。

けれど、哲ちゃんと一緒に歩きはじめると、あたりがみるみるセピア色に染まってゆく。

「六角、三条、錦。それぞれやんちゃ坊主のナワバリがありました。どれも、半径一〇〇mくらい。ちょうどその地域ごとに紙芝居屋さんが三つ来てはってね。それがナワバリの中心になってたんです」

哲ちゃんの想い出には、"おもちゃ"が登場しない。ビー玉、メンコくらい。それより遊ばなければならないことは山ほどあった。足に羽根が生えたように、彼等はあたりを飛びまわった。

「今では考えられん遊びもしました。たとえば戦争ゴッコ。最初はゴムの飛ばし合いで始まるんや。それが小石の投げ合いになる。しまいには直径四、五センチの石が飛んでくる……

そら、運わるく当たって泣く子もいた。少々のケガもしたやろう。けど、今なら親が出てきて大変ですやろ。あの当時はそんなことでモメたことはなかったねえ。みな、のんびりしてましたワ」

紙芝居は彼等のメインイベントだ。黄金バット、少年探偵団、光線魔神、ターザン坊……おじさんが売るソースせんべいや水アメを小さな手ににぎりしめ、やんちゃ達はつかの間、時を忘れた。よその地域の紙芝居を見にゆくのは、ちょっとしたスリルだった。時には、ナワバリを犯したと違うグループが追いかけてくることもある。でも、あの誘惑には勝てなかった。

小遣いが足りない時は、みんなで鴨川へドジョウを捕りに行った。佃煮屋さんに渡せば、これでけっこうな軍資金になった。

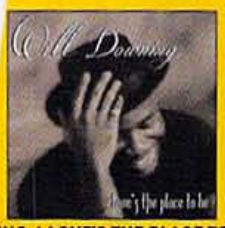
「今は道路もアスファルトになって、車も始終通りますけど、当時は土道で、車なんかめったに見かけませんでした。ほら、映画のアンタッチャブルに出て来るようなヤツ。たまにそれが通ったら、みんなで見にいったくらいです。それより牛や馬が荷物を積んで、よく往来してました」

近くにある酒造メーカーには酒樽を、

TOWER RECORDS

今月の
これを聴かないでどうする!!
By 永岡正直(京都店店長)

BETH NIELSEN CHAPMAN / YOU HOLD THE KEY ¥1,890
全編を通して感じる溢れるような優しさ。懐しいけど新しい、時代に流されないピュアな想いが伝わってくる秀作。



WILL DOWNING / LOVE'S THE PLACE TO BE ¥1,890
実力派の呼び声も高い彼の新作。洗いながらも、確実にクオリティーの高いソウルを聴かせてくれます。ジャケットも彼らしくて○。

OLETA ADAMS / EVOLUTION ¥1,890
ブラック・コンテンポラリーの枠に収まりきらない歌声を持つ彼女。今作ではぐっとAOR色の濃いアルバムに仕上がっています。

JEVETTA STEELE / HERE IT IS ¥1,890
大ヒットした「コーリング・ユー」のオリジナル・シンガー。待望のデビュー・アルバム。ゴスペル・フレイヴァー溢れる一枚です。

京都店
河原町ビブレ6F Tel. 075-212-7058
OPEN : A.M.11:00 – P.M.8:00

大阪店
心斎橋アメリカ村 Tel. 06-211-2997
OPEN : A.M.11:00 – P.M.9:00 (土日のみ10:00 OPEN)

TOWER RECORDS

L.A. CHICAGO BOSTON NEW YORK LONDON
SAPPORO SENDAI NIIGATA CHIBA
IKEBUKURO SHINJUKU SHIBUYA HACHIOJI
YOKOHAMA KAWASAKI NAGOYA
KYOTO OSAKA HIMEJI HIROSHIMA

すいばっこり町の思い出

Mental Nourishment

電通は昔からあった。一度、中へ入りたかったが、子どもは入れてもらえなかった。

ここは幼稚園。昔はお金持ちの子しか、幼稚園に行かへんかった。ここも、寂れてしもたなあ……

昔、ここは日銀やった。この辺りで盗難事件があってね。MPが多勢きて、えらい事件になったのを憶えてます。

この店は昔からハチミツを置いてる。当時は倉庫で、ドラム缶にハチミツが入れてあった。よう、なめに来たわ。

銭湯へは燃料に使うコークスを運ぶため、牛車や馬車がいつもやってきたという。

もちろん哲ちゃんたちがこれに目をつけないはずがない。そっとしのび寄っては、荷車の後ろに取り付いて遊んだ。しかしどんなに慎重にやっても見つかってしまい、叱られてしまうのだった。棒を振り回して怒るおじさんをシリ目に、彼等は何度もこの遊びをくりかえした。

でも、哲ちゃんたちはいつもおじさんを困らせてばかりいた訳ではない。ちょっとしたスロープに足を滑らせてあえぐ馬や牛の姿は、彼等の心をしても痛めていた。

「おっちゃん、かわいそうやんけ」

日々にさけぶ子どもたちを前に、玉のような汗をかいて顔を真っ赤にしたおじさんが怒鳴った。

「そんなこと言うのなら、おまえら、手伝うたらどないや!」

哲ちゃんたちが嬉々としてこの作業に参加したのはいうまでもない。それは小さな義侠心を大いに満足させるだけでなく、"一回さわってみたかった"馬や牛に触れるという、大きな余録まで与えてくれた。

ところで、牛や馬が往来すればそこには必ず"落し物"が発生する。当時、やんちゃたちにはこんな伝説があった。

「馬のウンコ踏んだら、背が高くなるてね。逆に、牛のウンコ踏んだら背が低くなる、そういうてました。牛のも馬のも、そこら中に落ちてた。ただ、出来たてフワフワを踏まなアカン。古いパサパサはダメ。ちょっとでも背が高くなりたかったもんやから、誰よりも早く踏みにいったもんや」

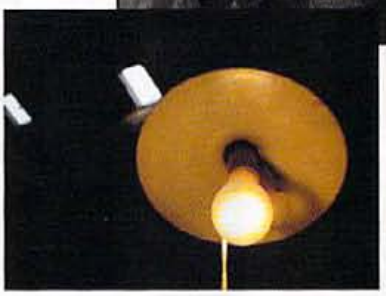
哲ちゃんたちの遊び場は、鳥丸通りにも及んだ。まずは市電。軌道上に五寸釘を置いて手裏剣づくり。火薬玉を並べて鳴らしたこともある。カンカンに怒った車掌が、電車を飛び降りて追

森さんの御主人と。
「あれえ？奥田さんの坊て、もっと可愛らしい人やったてえ？」
「そら、もう私も50過ぎてますがな」

昔、森さんの家にあった井戸のなごり。哲ちゃんもこの水を飲んでいた。

懐かしい路地。奥にある森さん(左の人物)の家を通り抜けると、三条通りから六角通りに出られた。

昔の面影はほとんどないけれど、これが哲ちゃんたちの通った中学校。



森さんの家は、土間が細い通路のようになっている。ぽっちり灯る電球は、あのときと同じだ。

いかけてきたこともあった。

「お腹が減ったら大丸の地下へ行くんです。そうすると料理講習みたいなものがあって、タマゴはこう焼くんです、みたいなことをしてはる。で、試食用に小さく切ったタマゴ焼きが並べてある。それを全部、食べてしまう。係員のおっさんに襟首つかまれて放り出されたこともありましたわ」

近所の鶏小屋から卵を盗りに行って、箒を手にしたお手伝いさんに追いかけられたこと。路地の奥をくぐり抜けて、馬小屋から干パン(馬のエサ)を失敬したこと。道ゆくたびに、哲ちゃんはいろんなエピソードを教えてくれた。

強かった陽ざしが、心なしか弱くなっている。そろそろ最後に、という訳で六角堂へ立ち寄った。ここは、彼の思い出がそのままの形で残っている、とっておきの場所なのだ。

「六角さん……ここだけは変わらへんねえ。かつての賑わいはあらへんけど。昔は盆踊りをやってて、二重、三重に人がグルグルめぐってね。それは盛大なものやった。夏も冬も七の付く日は縁日があって夜店がこう、ずーっと並んだもんや。楽しかったなあ。

あの柿に登ったり、お賽銭も盗ったことがあるなあ。子どもの手は小さいから、賽銭箱のすきまに入るんですわ。いろんな悪さするもんやから、みな、ここの坊さんによう捕まえられた。

我々を見つけると、真っ先に門を閉めてね。捕まると木に縛りつけられるんです。それで、親の名前を白状せい、てね。でも、オレ、絶対に白状せんかったよ」

いつしか哲ちゃんの顔は四〇数年の時を飛び越えて、子供のような笑みを浮かべていた。

取材が終ると、知人が舞妓さんを伴い彼を迎えにきた。彼はモスグリーンのソフトスーツ・ブラックのシャツ姿に着替え、出かけていった。そこには哲ちゃんの姿はなく、ただ、奥田哲朗氏の後姿があった。

あと四〇年経ったとき、人は今日の街角をどんなふうに思い出すのだろう。そんなことが、ふと、頭をよぎった。

取材・文／村上　慧
写真／大田メグミ

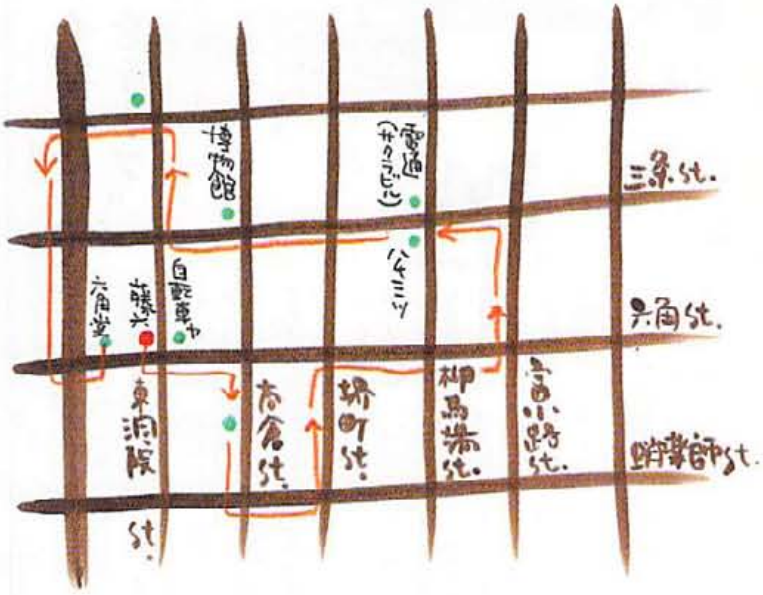
ところどころに残る、かつての風情。今ではなかなか見つからなくなった。

HITOTSUKYO CAFE
Ladies Only
0120-194-198 0120-194-198
0120-194-064 0120-194-064
SubCall 075-822-1231
1年1組
でんわ組

知らないこと多い。町

Mental Nourishment

これが京都の"へそ石"。その昔、平安京建設の際に六角堂が移築されようとしたとき、一夜にして16mほども堂がひとりでに移動したという。その跡にこれが残っていた。以来、京都の中心であるという伝説が伝えられる。

昔、ここに旗をあげるポールがあってね。25mくらいの高さがあった。一番上まで登れるのは、私だけやったなあ。

ここだけは、いつまでも変わらへん。
ボクらこの六角さんで育ったようなもんや。